

## 我々の親切は、誰にするのか

### — 日本的な親切の人間関係論 —

近藤良樹

#### 1. 親切は、ひと（人）にする

われわれの「親切」は、困ったり求めをもつ他人に対して、たまたまその場に居合わせる者が、ささやかな手助けをすることである。こう定義される親切は、英語では kindness になり、ドイツ語では Freundlichkeit になる。親切は、日本においては、事物にするものでも、動植物にするものでもない。人間に、「ひとに親切にする」のである。ときに酔っぱらいは、街路樹にぶつかりそうになって、これに「親切に」注意をする。だが、かれも、それが街路樹だと気づいたときには、「人の邪魔をして」と蹴り上げて、親切の気持を抱いた自分の非を行為で示す。

われわれの親切と異なって、英語では、しらふでも、草木にも「親切に kindly」する（この事情はドイツ語の freundlich でも同様のようである）。親切の気持をいなく範囲が、日本とは異なる。kind (freundlich) は、「親切」とは違い、草木にも動物にも言い、「優しさ」のように広い範囲に関わる。ならば、kind とは、「優しい」ことであり「親切な」ことではないのであろうが、しかし、われわれの「親切」に相当することばは、kindness であり、kindness の中核は、やはり、われわれの「親切」と同じであるように思われる。日本に「小さな親切運動」があるが、それにほぼ均しいものがアメリカでは“kindness movement”と称して展開されている。これは、草花をめでの動物を愛護する運動でもない。この kindness の対象とするものは、われわれの親切と同じく人間である。

日本では、足に毛糸がからみついて困っている猫を助けるのは、親切とはいわない。「猫に優しくする」にとどめる。動物とひとを本来われわれは、西洋のひととちがい、あまり区別しないのだが、親切に関しては、動物をその対象から外す。おそらくは、猫や犬が、ひとの親切を理解せず、「いらぬお世話を！」という目つきをして逃げるからであろう。

（親切の理解できる者に親切はする）ひとに親切にするのであるが、さらにわれわれの親切は限定的であって、人であっても死体には親切にしない。病室で「隣の病人が車椅子にのるのを、親切に手助けしてあげた」というけれども、後にこれを棺おけに入れることになっても、「その

死体の足をさげて親切に入れてあげた」とはいわない。そうであるのみか、われわれは、生きている者でも乳幼児や植物人間にも、「親切」にはしないのではないか。

「同情」なども、死んだ者にはしない。おそらく、植物人間にもしない。植物人間になった友人の見舞いにいって、「同情しました」とあとで感想をもらす場合、だれに同情しているのか。植物人間の友人にではない。その友人には痛恨のなみだをながし哀れみ悲しんだとしても、「同情」はしない。「同情する」その相手は、友人の家族であろう。父の葬儀に親戚が集まったというので喜んでいる幼児にも同情はしない。だが、親切を犬猫にまでいう英米では、やはり犬猫にも死体にも幼児にも「同情 (compassion, sympathy)」する。

われわれが同情や親切をこれらのものにしないのは、同情の場合、「同」「情」するのであるから、自分の「情」と「同じ」ものをもっていることが前提されるのであろう。死んだものには、「情」はなくなっている。植物人間もそうである。親切もそれに類した思いがあるのではないか。つまり、親切をするその相手が、自分と同じように、親切を親切として「理解できる」ことを前提にするということである。草木はもとより犬猫にも「親切」をいわないのは、それらがわれわれの親切を「親切」として理解してくれないからであろう。

(われわれの親切は、**相関的**) 親切は、「余計なお世話」「お節介」とみなされることもある。よけいなお世話と解される親切は、親切ではない。ひとりよがりの親切は、迷惑千番である。相手から「親切」と理解・受容されてはじめて、親切である。いくら純粹に一途に「愛」していたのだとしても相手が嫌がっていた場合は、「セクハラ」であり、「暴行」になるのと同じである。ひとを思う優しい(kind)気持があっても、独善的な親切では、親切(kind)にはならない。相手から親切として受けとめられる必要がある。親切は、相手次第である。やさしいわれわれは、その相手をしっかりと見ていて、それに応じて、親切になったり、優しくなったり、ていねいになったりするるのである。

交わる対象に応じて、われわれは、微妙に態度を変える。第一人称が一つ(英語なら I)のぶっきらぼうの欧米とちがい、相手に応じて「わたくし」「おれ」「おとうさん」等と変わるものと通じるものがありそうである。「私」や「僕」は、よそ行きの私であり、友だちの前では「おれ」「わし」となる。わが子のまえでは「お父さん」となる。相手にあわせて、われわれの自己は決定される。非自立相関的である。どこの人類でも、もともと群居の哺乳類のこと、相関的に自己も存立しているはずであるが、その相関の度合いが、われわれでは大きい。よく言えば、気遣いがこまやかなのであり、悪く言えば、独立心・主体性に乏しいのである。

kindnessの国々では、自主自立の個人主義が強く、ひとがどうしていようがわれわれほどには気にせず、自己は、どこで誰に面していようとも、不変の「私(I)」を貫く。その自主自立の根本の態度が親切でも出てくるのであろう。相手が親友であろうと、生きていようと死んでいようと、犬猫を前にしよう、気にすることはない。一貫した不変の「親切な私(I)」が、自信をもって親切を貫いていくのである。

## 2. 親切は、ひと(他人)にする

われわれは、犬猫にではなく「ひとに親切にする」のであるが、さらに限定的で、その「ひと」とはというと、日本では、「他人(ひと)」になる。自分の家族には親切は言わない。kindnessの国では、犬猫のみならず家族にも親切にする。ドイツの親切(Freundlichkeit)も家の内外を問わない。個人主義が徹底しているので、各個人にとっては、家の内外の別は、大した違いではないものようである。われわれ日本の場合が特殊なのであろうか。家族とその外との仕切りが、われわれでは大きい。そとでは人一倍親切で同情する人であっても、家族には同情もしないし親切にもしない。「こどもに、親切にしていた」と聞くと、そのこどもは、他人であることがわかる。同情でもそうである。「わが子に同情する」ような親は、親ではない。

では、なぜに、親切や同情を家族にいわないのであらうか。手助けや思いやりということでは、家族も当然その対象となる。違いは、家族は一心同体的な存在なので、特別な深い関わり方になることである。家族の困っていることでは、単なる小さな親切にはとどまれない。これには、親切を超過して献身的となる(受難への同情も同じで、家族では、傍観者の同情にはとどまらず、距離をなくして受難の当事者になってしまう)。西欧でもそれは似通ったものであろう。われわれ日本人は、この、家での特別のあり方をそれとして区別して、そとでの親切(あるいは同情)をうちにはいわないのではないか。

親切は、たまたまの出会いに、余裕でする、ほんのささやかな手助けである。親切は、本質的に、「小さな親切」である。だが、日本の家庭では、自己犠牲的な献身は当たり前で、親たちは、いうなら超親切的な毎日である。余裕にするささやかな手助けの親切で形容できるような、なまやさしいものではない。このような超親切的な深い愛にそまった深紅の家族のうちでは、ささやかな薄紅の、ほんのり温かな親切は、色をうしなう。見えなくなる。

親切は、他者距離を保って、ほんの表面のごくささやかな援助をするにとどめる。他人であることを超えて踏み込んでではない。むしろ、薄紅の好意にとどめるのが、親切である。他人としての遠慮をしなくてはならない。深紅の濃い愛をささげるのは、非常識で、迷惑ともなる。ささやかな手助けのみのつもりで、若い女性が、見も知らずの親切な男性に重い荷物を少し運んでもらったのに、彼から深紅の愛をもって「どう、今夜は一緒に…」とあたかも妻に接するような超親切的な誘いを受けるのでは、親切は、ぶちこわしとなる。

家族では、深紅の超親切が原則であるが、例外的に、他人行儀になっているときには親切や同情をいうことがある。深紅に染まっていない他人行儀な白紙状態のところでのみ、薄紅は見えてくる。パソコンにてこずっている父親が、息子に対して「もおちよっと、親切に教えてくれにゃあ、分かるもんきやあ！」と苦情をいう。パソコンに関しては、両者は、別世界にいたのであり、あたかも他人であるかのような場面に出くわしているわけである。ここでの父親の不満は、別世界の他人同士のような状態なのに、接し方は、むしろ、他人に対するような遠慮とか敬意を表することがなく、親を小馬鹿にしていることである。他人にするように、よい意味で距離をとり遠慮をして、他人に教えるときのように、忍耐・寛容・優しさのころころをもって、つまりは「親切」で接してくれと不平を言っているのである。

(通りすがりの他人にする) 親切は、たまたまに出合った他人の間でするのが典型であらう。

親切と似かよった、無償の手助けであるボランティアと費やす時間は変わらなかったとしても、両者は、区別される。ボランティアは、計画的で、本格的な仕事であり、手助けの必要なところには地のはてまでも駆けつけていく。だが、親切は、しなくてもどうということのないもので、たまたま生じた困惑に対して、その場に居合わせた通りすがりの他人が（従って、通りすがりの他人に）即興にささやかな手助けをするのである。

親切は、その同じ場にいることを前提とする。ほんのささやかな手助けなので、偶々に隣りあわせた赤の他人に頼めるのである。遠方からわざわざに呼ぶことはない。沖をゆったりと航行している巨大タンカーを岸辺にと手招きして引き寄せ、「ここでキャンプをしてもいいと思いますか」と親切を請う者には、親切を請えるのがだれになるか、船員たちがその逞しい腕をもって体に覚えさせてくれることであろう。親切は、単に他人にするというのみでは不十分であって、たまたま同じ場所に居合わせている行きずりの他人に限定されることになる。友人にする親切は、嫌われたくない等の不純な動機をもつ。純粋な親切は、行きずり、通りすがりの他人にする親切である。

### 3. 親切は、困っているひと、求めのあるひとにする

親切は、ささやかな無償の手助け・援助を、他人にすることである。だが、ならばと、近所のポストに小銭をなげいれてまわったり、たまたま同席した旅行者に、まといについて観光案内をするのは親切であろうか。当人は「いいことをして、気持ちがいい…」と親切のつもりであっても、相手には、迷惑であり、「余計なお世話」である。その自称の親切は、場合によるとハラメントであり、「犯罪」となる。親切にするその他人は、困っているのではなくてはならない。相手が困っていること、求めていることをしっかりと確かめてから親切にするものである。

親切は、必ずしも困るまでになっただけでなく、その親切の贈与をありがたいと思える、それを求める気持のあるところにも通じる。意思・欲求、つまり「求め」があるところで、困る手前において、これに答えていくのである。コーヒーをいれていて、ついでに、喜んでくれそうなひとにも作ってあげるのは、親切であろう。困っていたり、求めのあることを察して、これに答えるのが親切である。

（「**小さな親切**」ですますが、**親切**）困っている、求めているといっても、その客観的な困窮度が大きい場合は、親切の対象とはならない。厳密にいうと、親切にされる者にとっての主観的な困窮度は大きいものでもかまわないが、親切にする者には、それに答えるに小さな手助けにとどまるのではなくてはならない。ささやかな困惑にささやかに答えるのが親切の一般である。

親切にするのは、しばしば赤の他人である。そんな見も知らずのひとに、駅前で、「借金で困ってるんです、お願いします、50万円下さい」と請われたからといっても、親切にする者はいない。このお願いは、「冗談」か、「聞きがちがよい」か、でなければ、「恐喝」と受け取られることになる。親切のかかわる困窮・求めは、親切にする者にとって、対処するに、ささやかなもので済むのではなくてはならない。

家族には負担の大きいものでも無理をして超親切に伝えていく。年寄りに「オレ、オレ」と孫が電話で泣きつくと50万や100万ならすぐにでも銀行に振り込んでくれる。それが新聞で犯罪として問題になるのは、その「オレ」が他人であった場合に限られる。われわれは、他人には冷たい。他人にするものとしては、援助は、ほんのささやかで負担にならないものに限定する。これがわれわれの親切である。

道をたずねられたら、「あっちですよ」というだけで放置するのが親切で、「ご一緒しましょう、どこのお宅に何のために、お出でなんですか」というのでは、くどくなる。ましてや、「一緒にいきましょう、今日は暇ですから。夜は一緒に食事して…」と超親切になることを、親切にされるひとは、求めない。他人同士であることに自制し遠慮しあって、ささやかにのみ触れ合うのが親切のマナーである。

困っている者、求めのある者に親切はするのだが、困っているかどうかは、主観の問題であり、外見からは分からないことが多い。相手が「困っている」と表現すれば、これは、確かである。道を尋ねるとか、パソコンの「このところが分からない」というような場合である。これにこたえるのは、百パーセント、親切と評価され、喜ばれる。だが、ひとは、むやみに困窮をそとに表現するものではない。自分の評価にかかわる問題であったとすると、隠してひとり悩むことになる。親切は、この場合、困窮そのものの発見からはじまる。

表面的には、困っているひと・求めある人と、そうでないひとの区別がつきにくい。いずれも、こまっていない、求めているとの装いをしている。この隠れた困窮や求めの発見は、それだけで、そのひとへの親切となるぐらい、当人には、ありがたいものとなる。しかし、ふつうの人と比較してみても明らかに困窮した生活なのに、当人は、そうは思わず、清貧に誇りをもって生きているということもある。そういうひとに親切の申し出をするのは、おそらく「いらぬお節介」となろう。また、本人が欲していたとしても、余計なことになる場合もある。たばこを欲しそうにしているのを見て、「一本どうぞ」と親切にしたとしても、そのひとが禁煙の最中だったとすると、「余計なお世話」である。

親切の過剰は、その相手には、いらぬお節介で迷惑となる。ここでは、親切をやめることこそが親切になる。場合によっては、親切の過剰は、親切を頼りにするパラサイト（迷惑者）をはびこらせることもある。登山に際して予備の食料をもたず、少し困るとヘリコプターを呼んでみたり、雨が降りそうでも傘を持参せず、ひとの傘を頼りにする寄生虫的存在者をつくる。こういう者の困惑や求めには、不親切にしておく方が長い目では親切となる。

#### 4 親切は、(困っていても) いやな者には発動しない

困っていたり、求めのある他人に親切はなされるのだが、親切にされる人は、それでよいとしても、他方では、親切にする者の意向というものがある。親切にするのもしないのも親切な人の自由である。親切は義務ではない。善意・好意で自発的にする任意の贈与である。困窮しているとしても、嫌いな相手には、親切にはしたくない。親切の気持ちを逆なでするような相手の対応がある場合は、親切心は萎縮する。

嫌いな者とは、遠ざけたい者であるから、親切に近づくことには抵抗したくなり、親切は、発動しにくい。嫌いな者でも、困っているから助けて欲しいといえ、嫌いな程度と、その援助の内容しだいでは、親切にしようが、わざわざ、その求めているものを推測し気を配って、親切にするようなことは、しないであろう。だが、好きな相手には、近づきたいし、贈与的になるので、よく気をつけ親切を連発したくなる。

憎悪する相手になると、これには懲罰を加え、これを抹殺したいのであって、親切の贈与などとんでもないこととなる。「舌切り雀」の欲張りばあさんに対するように、懲らしめとなるようなものを背負わせたいことはあっても、価値あるものの贈与は拒絶することであろう。親切は、ささやかな手助け、小さな贈与だとはいえ、相手のプラスになることにはまちがいはなく、いくら相手が困っていても、求めているも、憎悪する相手には親切は発動しない。「敵意」をもったり、「悪意」をもつ場合も、同様である。親切は、価値あるものの贈与であり、反価値の付与を意図する悪意に反する。敵に親切にするのは、利敵行為となる。

(親切は、好意をもてるひとにする) 親切にする相手は、困っていたり求めをもつ他人であるが、さらには、親切にするひとの方が、敵意や悪意をもっていないひとということになる。積極的には、好意をいただけるひとに、親切心は向けられる。相手のプラスとなることを望んだり、近づきたいと思っているような場合、つまり好意の気持をさそわれるならば、親切もさそわれることであろう。ただし、親切が請われるのは、駅頭で道を突然たずねられるときのように、たまたまのことであり、見知らぬ他人からであることが結構ある。「交番は、どちらですか」と聞かれ、とっさに「ここを出てすぐ左です」と反応する。その相手について、好きとか嫌いとかの判断をする前に、親切は終わる。だが、そういう場合でも、強く不快感を与えるような装いの相手には、親切心は発動しない。それをこころえているから、たとえ茶ばつ等で不快感を与える若者でも、「おい、そこのはげのおっさんよお！」と私に呼びかけるのではなく、頭をぺこぺこさげながら、にこやかに好意的に受け取られるようにと努力しつつ、「ちょっと、すみませーん、交番を教えてください」と尋ねるのである。

親切は、積極的には、すきな相手に向けられる。すきで、ちかづきたいということであれば、ささやかな贈与・手助けの親切は、それを満たす機会として誘発される。「好意」は、関わる他者に親しみをいただき、これを好きだと感じることである。是認的で、その悪をも肯定的にうけとめようとし、あたたかく優しく思いやりある態度を持って、これに近づきたい、近づけたいと思い、そのひとのためになることをしてあげたいと、贈与的になった心構えであろう。

好意の相手は、他人である。好きで親しみをもち贈与的であっても、我が家のものには、「好意的」にふるまうとは言わない。好意を超えているからである。われわれの好意は、家族のそとの、他人に向けていられる、他者距離を維持した、ささやかな薄紅の愛である。

(「善意」や「慈しみの心」から発動する親切もある) 「善意」は、反悪意として、相手のためになる善いことを願っている。相手を肯定的によい方に理解し、その人のためになる善いことをと利他的贈与的な気持をもつものである。善意の親切がさそわれる相手は、好意の相手とちがって、社会的な弱者など、むしろ、価値あるものを喪失して受難状態にあるひとの方に傾

く。これも、他人に対して発動する利他の意思である。家族には、良かれと思ってするのは当たり前で、家族は相互にもう一人の自分であり、傍観者には留められない。善意も好意も、傍観者の位置にとどまりつつ他人に対して抱くものになる。

好意は、善意より主観的で、相手のことを好きで、好ましく思い、親しみをいだいて、近づきたいという、引かれる契機が顕著である。好意の親切は、好きな者に向けられる。善意は、そういう引かれるとか好きだということは問題にしない。善意は、善いことを願う冷静な意志が中心になる。善意の親切は、慈悲心からする親切もそうだろうが、真に手助けが求められる受難者・弱者にと目をかけ、ひいきする。

##### 5. 近づきたい他人を選んでする親切もある

(下心をもつての親切) 親切は、見知らぬ他人に近づける絶好の機会なので、その手段として利用される。手段としての、いわば「下心のある親切」は、「善意」や「慈悲」からの親切と違って、社会的弱者をむしろ除外し差別する。「下心ある親切」は、親切が目的ではなく、下心が主で、親切は単なる手段・えさである。

親切は、無関係の他人に怪しまれずに近づき、わずかな負担で、おおきな獲物をものにできる機会となる。故意に、下心をもつて関わりをねらっていたのに、自分がたまたま居合わせて手助けをすることになった、相手の方から関係が求められてきたととぼけることができる。

もともと親切は、たまたまの出会いに、見知らぬ他人がしてくれるのだから、無関係のものが親切にしてくることに、疑問をいさぐことは少ない。軽い他者間接触であり、貸し借りの意識もさしてもつ必要もなく、受け入れやすい。しかも、親切心をもって、つまり善意で好意的にひいきしてくれているのである。ひとの好意・善意は、断りにくい。それを見越して、下心あるものは、親切をたくみに利用していく。

親切の悪用としては、「親切ごかし」もある。親切ごかしは、親切に相手の手助けをし、贈与的利他的に見せかけながら、その実、自分の利益を追求していることをいう。「猿かに合戦」の猿が、かにのために青い柿を取ってやったようにである。

下心のある親切の「下心」は、親切の場面には見えず隠されていて、犯罪的意図までをふくむが、親切ごかしの場合は、自分の利益の優先をその親切自身において見せる。親切の度合いからいうと、下心をもつてのそれは、「赤ずきんちゃん」へのおおかみの親切のように、過剰なぐらいに贈与的である。親切ごかしは冷淡で、青い柿をなげつけた猿のように、親切の贈与の少なさによって、おのれを露呈する。

(手段としての親切の相手) 親切は、困っていたり求めをもつ他人にする。下心ある親切や親切ごかしは、さらにその他人を限定していく。「赤ずきんちゃん」のおおかみは、森で木こりが困っていたり、男の子が道に迷って泣いていても、親切にはしない。それらを見越して、ひたすらに、赤ずきんちゃんのみにと親切の対象を限定する。それは、彼女のみが自分の目的とするものを満たしてくれるからである。自分の求めを満たしてくれる相手にと限定して、親切の相手を選択するのである。

親切ごかしの、「猿かに合戦」の猿にしても同様である。困窮している無産の蟹どもに親切をしようとはしない。柿の木の所有者である蟹にのみ親切にしていく。自分の欲しいものを充足してくれる相手にと限定しての親切である。下心ある親切も親切ごかしも、親切にする相手の困惑や求めに応じていくのではあるが、その真の目的は、他人への手助けではなく、自分の欲望の充足である。つまりは、「自分に親切にする」のだということができなくもない。

(隣近所との親切の交換) 親切は、たまたまとなりあった他人にするが、この隣りが固定するときがある。隣近所である。隣近所と親切にしあうのも、単純に親切をするというのではなく、別の意図(下心)あつてのものである。好意的であつて敵意や悪意はもっておらず、穏やかな隣同士でいたいこと、ぎくしゃくした関係にはなりたくないことを、親切をもって表示しあうのである。好意や親切は、他人を対象とし近すぎず離れすぎず親しみあい、ほどよい隣近所との関係をつくりだす。これも下心があるのだといえ、いえる。たまたまに隣りだから、仲良くしておこうというだけのことである。

だが、そのことをもって、親切が不純だとは、いわないであろう。他人同士が近づききっかけはそうあるものではない。親切は、それを実現する。しかも、親切では、他者距離を維持し、遠慮しあつて、他人であることを超えて踏み込まないものだと相互理解がある。ささやかな贈与、ちいさな手助けに限定しあつているのである。安らぎの我が家の隣りとは、できるだけ和やかな関係でありたいが、他人であることを超えてうちに踏み込んでこられるのも、困る。親切と好意は、そのことをうまく実現する。親切は、ここでは手段となっているのであるが、良好な隣人関係をつくらうというだけで他意はなく、これは、よい利用の仕方である。

親切の好意には、ひとは、好意をもって応えたい。それにふさわしい「感謝」の気持ちを持ち、親切なひとの負担に配慮して「遠慮」もするし、自らも親切で応えようとする。この好意の応答には、さらに親切と好意が帰ってくる。隣近所に好意の好循環が形成される。他人であることを超えず、好意的に交わるという親切の好循環である。

(こんどう よしき 広島大学大学院文学研究科教授)

「キーワード」

親切、同情、好意、善意、他人



## Zu Wem Sind Wir Freundlich?

-Das Zwischenmenschliche Verhaeltnis in der Japanischen Freundlichkeit-

### Yoshiki KONDO

Es ist unsere Freundlichkeit (Shinsetsu im Japanischen), dass man die kleine Hilfe zufaellig dem Fremden, der Schwierigkeit oder Forderung hat, leistet. Das Wort dieser Definition mag "Freundlichkeit" im Deutschen oder "kindness" im Englischen sein. Waehrend die Freundlichkeit im Deutschen (kindness im Englischen) sowohl fuer Menschen als auch fuer Tiere oder Pflanzen gebraucht werden kann, ist das Objekt unserer Freundlichkeit nur der Mensch.

Noch mehr koennen wir Japaner keinen Saeugling, keinen paralysierten Menschen, keinen Leichnam freundlich behandeln. Unsere Freundlichkeit betrifft wahrscheinlich nur den Mann, der unsere freundliche Aktion als Freundlichkeit verstehen kann.

Ferner unser Objekt der Freundlichkeit (Shinsetsu) auf Fremde beschraenkt. Wir behandeln nur den Fremde freundlich. Im Deutschen (Englischen) kann die Freundlichkeit (kindness) auch in der eigenen Familie gebraucht werden. Aber gewoehnlich verwenden wir die Freundlichkeit (Shinsetsu) nie fuer die eigne Familie. Ich denke, unsere japanischen Familien lieben sich gegenseitig tief und koennen mit der Freundlichkeit als kleiner Liebe des Zuschauers nicht zufrieden sein.

Weiter muss dieser Fremde, den wir freundlich behandeln, im konkreten Sinne die Schwierigkeit oder die Forderung in Bezug auf die Freundlichkeit haben. Wenn der Mann der gegebenen Freundlichkeit nicht zufrieden ist, ist diese Hilfe keine Freundlichkeit sondern nur nutzlose Unterstuetzung oder die Einmischung. Muehe wird zur Freundlichkeit erst dann, wenn der Empfaenger mit Freuden sie annimmt.

平成 16 年 12 月

『メタフュシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座)第 35 卷別冊 33~40 頁